

○平成29年度代表派遣実施計画の変更について、以下のとおり、実施計画の変更を行う。

		会議名称	派遣候補者 (職名)	派遣期間 (会期分)	開催地 (国)	備考
1	当初	アジア科学アカデミー・科学協会連合理事会	大西 隆 第三部会員 (豊橋技術科学大学学 長)	平成29年 9月28日～9月29 日	タガイタイ (フィリピン)	会期の変更  ※実施計画については第 242回幹事会、派遣者につ いては、第246回幹事会に てそれぞれ承認済み
	変更後			平成29年 9月21日～23日		
2	当初	アジア科学アカデミー・科学協会連合地域ワ ークショップ	未定	平成29年 9月28日～9月29 日	タガイタイ (フィリピン)	派遣候補者、会期、開催地 の変更  ※実施計画については第 242回幹事会にて承認済み
	変更後			平成29年 11月16日～18日		

※候補者の会員・連携会員等の種別については、23期現在

#### 4. シンポジウム等（第23期中の開催）

提案13

公開シンポジウム「「学術の再生産」が危ない」の開催について

1. 主催：日本学術会議社会学委員会ジェンダー研究分科会
2. 共催：なし
3. 後援：なし
4. 日時：平成29年9月18日（月）13:00～16:30
5. 場所：青山学院大学
6. 分科会等の開催：開催予定

7. 開催趣旨：日本における女性研究者の少なさやその不安定なキャリアパス・勤務環境については、近年急速に関心が高まり、日本学術会議においても2014年9月に報告書『学術分野における男女共同参画促進のための課題と推進策』、2015年8月には提言『科学者コミュニティにおける女性の参画を拡大する方策』が発表された。また科学技術・学術政策研究所（NISTEP）でも調査資料「日本の大学教員の女性比率に関する分析」（ポストドクター等の雇用状況・博士課程在籍者への経済的支援状況調査）（RM182：2010年4月）、「ポストドクター等の雇用・進路に関する調査」（RM202：2011年12月）、「日本の大学教員の女性比率に関する分析」（RM209：2012年5月）、ディスカッション・ペーパー「ポストドクターの正規職への移行に関する研究」（DP109：2014年5月）、報告書『博士人材追跡調査第一次報告書』（NR165：2015年11月）などにおいて、女性を含む若手研究者のキャリアパス・勤務状況についてのデータ収集と分析が進みつつある。

しかしながら以下の点をかんがみると、女性<研究者／院卒者／学術関係者>を取り巻く状況はむしろ厳しさを増すことが予想される。

第一に、近年の女性研究者支援は自然科学系の若手研究者拡大および正規職従事者内での上位職階への進出に注力される傾向があり、これまで女性研究者の多数を占めてきた人文系の非常勤職従事者の待遇改善が、見落とされがちである。NISTEPの各種調査でも、人文系とりわけ文学は博士課程修了者の中でも最も女性が多い領域であるにもかかわらず、その70.3%の進路は非常勤（男性の非常勤率は53.6%）であることが示されている。院卒後長期間経過するほどポストドクに占める女性比率は大きくなり、正規職への移行率は下がるが、他方で近年の大学改革の中で非常勤予算が削減される動きもあり、一度非正規トラックに入った人文系女性非正規職研究者が、院卒後五年以上経過後にも尊厳ある働き方は、難しくなっている。

第二に、人文系あるいは社会科学系の中でもソーシャルワーク的領域の大学教員以外の専門職の、非正規化・業務のモジュール化が進んでいることである。小中高教員、博物館学芸員、図書館司書、公民館・女性センターや多文化共生センターなどの専門職員は、その養成課程を学部から大学院へと移行できておらず、教員や学芸員などはむしろ学士課程における単位数の増加へと移行して資格取得者を減少させる方向に向かっている。そのこ

とが、各種施設において資格や専門的知識を有しない者がモジュール化された業務を低賃金での非正規職で担う、という業態を常態化させ、その常態化が資格取得者や大学院における専門的知識修得者の就職困難や貧困を増加させ、ますます資格取得者を減少させる方向でのカリキュラム改革に拍車をかけてしまうという、悪循環が生まれている。

第三に、第二の点にも関連することであるが、大学や企業、地域社会における男女共同参画・ダイバーシティ推進事業の専門性が社会的に認識されておらず、これらの事業に従事する人材の「専門性の再生産」の制度的保障がなされていないことである。とりわけ近年の女性研究者支援事業の拡大によって各地の大学に男女共同参画推進室が誕生したが、研究者支援事業の専門職員には任期付や非常勤での雇用が少なくなく、男女共同参画施策やワークライフバランスをめぐる議論、保育・介護問題に関する専門的知識を必要とされるポジションにあっても、狭義の事業遂行業務以外に従事することを禁じられ、自らの専門性を再生産するための研究費・研究時間・研究室等の勤務環境を保障されないこともまま見られる。しかしながら現在、ようやく各地の大学の男女共同参画室およびそこがおこなっている女性研究者支援事業自体についての全国規模でのデータ収集・比較がおこなわれた始めた状態であり、上記のような専門職員の勤務環境に対する検討には十分に手がつけられていない。

以上のように、女性研究者支援事業推進の陰で見落とされたり、あるいは支援推進事業自体が生み出しかねない、女性比率の多い学術関係者の貧困の、新たな側面について問題提起をおこない、今後必要な取り組みについて考えることが、本シンポジウムの目的である。

8. 次 第：

13：00 趣旨説明

海妻 径子（日本学術会議連携会員、岩手大学人文社会科学部准教授）

13：10 報告 1

「女性研究者はどこにいるのか —ジェンダー統計の現状と限界を探る」

河野 銀子（日本学術会議連携会員、山形大学地域教育文化学部教授）

13：35 報告 2

「非正規化のすすむ図書館職場で専門性は保てるか —専門職の非正規化が女性によって受け入れられている現状を考える」

廣森 直子（青森県立保健大学社会福祉学科講師）

14：00—14:10 （ 質問受付・小休憩 ）

14：10 報告 3

「女性研究者支援」事業は誰のためにあるのか —研究者の消費と搾取構造を考える」

清末 愛砂（室蘭工業大学大学院環境創生工学系専攻准教授）

14：35 報告 4

「女性研究者の貧困をどう解決するか？」

羽場久美子（日本学術会議第一部会員、青山学院大学大学院国際政治経済学研究科教授）

15：00—15：15 （ 休憩 ）

15：15 総合討論

（司会）海妻径子（日本学術会議連携会員、岩手大学人文社会科学部准教授）

16：30 閉会

9. 関係部の承認の有無：第一部承認

(下線の講演者は、主催分科会委員)

公開シンポジウム「ジェンダー平等政策の今を問う」の開催について

1. 主 催：日本学術会議法学委員会ジェンダー法分科会、社会学委員会ジェンダー政策分科会
2. 共 催：なし
3. 後 援：日本ジェンダー法学会
4. 日 時：平成28年9月23日（土・祝）13：30～17：00
5. 場 所：学習院大学目白キャンパス 西2号館301教室
6. 分科会等の開催：開催予定
7. 開催趣旨：第2次安倍政権においては、女性活躍推進法が制定されるなど、女性が労働力として、市場において大きな役割を果たすことが一層期待されるようになってきた。「すべての女性が輝く社会づくり本部」による「女性活躍加速のための重点方針2017」の策定等はその一つの例である。同重点方針には、市場における働き方改革、女性に対する暴力への対応、育児・介護といった伝統的な女性役割に対する対応といった総合的施策が盛り込まれている。本シンポジウムでは、最近の政府の施策が女性に焦点を当ててはいるが、ジェンダー平等を促進する施策とはなっていない状況を前提として、その理由の分析及び対策について検討し、より適切なジェンダー平等のための施策を提案する。
8. 次 第：
  - 13：30 趣旨説明  
後藤弘子（日本学術会議第一部会員、千葉大学大学院専門法務研究科教授）
  - 13：40 第2次安倍政権と男女共同参画関連施策  
 皆川満寿美（早稲田大学ほか非常勤講師）
  - 14：10 「働き方改革」とジェンダー平等  
浅倉むつ子（日本学術会議連携会員、早稲田大学大学院法務研究科教授）
  - 14：40 性刑法改正とジェンダー平等  
 後藤弘子（日本学術会議第一部会員、千葉大学大学院専門法務研究科教授）
  - 15：10 高齢者介護政策とジェンダー平等  
廣瀬真理子（日本学術会議第一部会員、東海大学教養学部教授）
  - 15：40 休憩
  - 16：00 総合討論  
 司会 吉田克己（日本学術会議第一部会員、早稲田大学大学院法務研究科教授）
  - 17：00 閉会のあいさつ  
三成美保（日本学術会議第一部会員、奈良女子大学副学長・教授）

9. 関係部の承認の有無：第一部承認

(下線の講演者は、主催分科会委員)

## シンポジウム「進化学と自然史博物館」の開催について

1. 主 催：日本学術会議基礎生物学委員会・統合生物学委員会合同進化学分科会
2. 共 催：東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻（予定）
3. 後 援：日本進化学会（予定）
4. 日 時：平成 29 年 9 月 30 日（土） 14：00 ～ 18：00
5. 場 所：東京大学理学部二号館大講堂
6. 分科会等の開催：開催予定
7. 開催趣旨：本シンポジウムは、日本学術会議提言「国立自然史博物館設立の必要性」（2016 年 5 月）を受けて発案されたものである。19 世紀に生物学の中心的存在だった自然史学から進化学が誕生したが、その後の生物学の発展の中で、記述を中心とする分野だとして軽んじられ、20 世紀には地盤沈下していった。しかし、生命の歴史を刻んだゲノムの塩基配列決定にもとづく研究が一般的になってきた 21 世紀にはいると、進化概念が生物学を統合するという気運が高まり、それとともに自然史学はふたたび生物学の中心的存在に復活しつつある。このような歴史的な学問分野の発展を前提に、本シンポジウムで進化学と自然史博物館について、いろいろな側面から議論することとした。
8. 次 第：
  - 14：00～14：05 主催者あいさつ
  - 14：05～14：25
    - 講演 1：沖繩に国立自然史博物館を！（仮題）  
西田 睦（日本学術会議連携会員、琉球大学理事・副学長）
  - 14：25～14：45
    - 講演 2：生物多様性の進化を表現する系統樹曼荼羅  
長谷川政美（大学共同利用機関法人情報・システム研究機構統計数理研究所 名誉教授）
  - 14：45～15：05
    - 講演 3：化石の植物学と自然史学（仮題）  
西田治文（日本学術会議連携会員、中央大学理工学部教授）
  - 15：05～15：25
    - 講演 4：共進化に関する研究と自然史学（仮題）  
深津武馬（日本学術会議連携会員、国立研究開発法人産業技術総合研究所生物プロセス研究部門首席研究員）
  - 15：25～15：45 休憩
  - 15：45～16：05
    - 講演 5：鳥類の家禽化によるさえずりの変化  
岡ノ谷一夫（日本学術会議連携会員、東京大学大学院総合文化研究科教授）
  - 16：05～16：25

講演6：学問分野を統合するような自然史博物館への期待

長谷部光泰（日本学術会議連携会員、大学共同利用機関法人自然科学研究機構基礎生物学研究所教授）

16：25～16：45

講演6：進化研究を中心とした自然史博物館の構想

斎藤成也（日本学術会議連携会員、大学共同利用機関法人情報・システム研究機構国立遺伝学研究所集団遺伝研究部門教授）

17：00～18：00

総合討論：自然史博物館に期待すること

9. 関係部の承認の有無：第二部承認

（下線の講演者は、主催分科会委員）

公開ワークショップ「誰のために科学をするのか―国連の持続可能な開発目標を通じて考える」の開催について

1. 主 催：日本学術会議若手アカデミー、岡山大学
2. 共 催：科学技術振興機構研究開発戦略センター（予定）、国際高等研究所（予定）
3. 日 時：平成 29 年 8 月 31 日（木）11:00～18:00、9 月 1 日（金）10:00～12:00
4. 場 所：岡山大学 50 周年記念館
5. 分科会等の開催：なし
6. 開催趣旨：国連の持続可能な開発目標を理解し、若手・地方から発信するための、関連した学術活動のあり方を考える。
7. 次 第：

8 月 31 日【講演会】11:00～13:00（岡山大学 50 周年記念館金光ホール）

開会挨拶（5 分）「岡山大学で国連の持続可能な開発目標を推進する」

榎野博史（岡山大学長）

講演 1（20 分）「国連の持続可能な開発目標と学術：国際から地域へ」

有本建男（政策研究大学院大学教授、外務省科学技術外交推進会議委員）

講演 2（20 分）「国連持続可能な開発目標に取り組む学術への支援」

大竹暁（国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)上席フェロー）

講演 3（20 分）「芸術・学術と、企業・経済の協働」（仮）

大原あかね（大原美術館理事長）

パネルディスカッション（45 分）「国連の持続可能な開発目標に、セクターを超えて学術も取り組む：なぜ必要か、何が課題か、どのように進めるか」

メンバー：

有本建男（政策研究大学院大学教授、外務省科学技術外交推進会議委員）、

大竹暁（国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)上席フェロー）、

大原あかね（大原美術館理事長）、

狩野光伸（日本学術会議特任連携会員、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授）

北村友人（日本学術会議連携会員、東京大学大学院教育学研究科准教授）、

福永真弓（日本学術会議連携会員、東京大学大学院新領域創成科学研究科准教授）、

流尾正亮（岡山大学総務・企画部社会連携支援室地域総合研究センター(アゴラ)職員、元岡山市役所政策局政策企画課副主査、日本ユネスコ国内委員会(ESD)世界会議推進局岡山 ESD 推進協議会事務局員）

小村俊平（株式会社ベネッセコーポレーション学校カンパニー教育イノベーション推進課課長、経済協力開発機構(OECD)日本イノベーション教育ネットワーク事務局長）

質疑（5 分）

まとめ・閉会挨拶（5 分）

狩野光伸（日本学術会議特任連携会員、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授）

8月31日【ワークショップその1】15:00～18:00（岡山大学50周年記念館会議室）

- ・UN-SDGsの目標17パートナーシップを念頭に、特に目標3（医療関係）、目標4（教育関係）、目標13・14・15（環境関連）の3グループ（15名ずつ程度を目安）に分かれ、それぞれの目標と関連して、どんな具体的な課題がどの地域にあるかを知る。
- ・その課題と、自らの学術活動（関連する教育内容を含む）が、どのように関連する可能性があるか、どんな協働の可能性や展開がありうるか、アイデアを互いに共有する。それを進めるには、どのような支援が必要かを考える。
- ・その後、グループ間の共通課題についても、互いに認識する。

主な登壇者：

- ・医療（コーディネーター：狩野光伸（日本学術会議特任連携会員、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授））
- ・環境（コーディネーター：福永真弓（日本学術会議連携会員、東京大学大学院新領域創成科学研究科准教授））
- ・教育（コーディネーター：北村友人（日本学術会議連携会員、東京大学大学院教育学研究科准教授）、小村俊平（株式会社ベネッセコーポレーション学校カンパニー教育イノベーション推進課課長、経済協力開発機構(OECD)日本イノベーション教育ネットワーク事務局長）

他の参加者：（見込み）

- ・日本学術会議若手アカデミー委員数名（調整中）
- ・近隣の関連若手研究者
- ・岡山大学：関係の領域に興味を持つ、教員、職員等

9月1日【ワークショップその2】10:00～12:00（岡山大学50周年記念館会議室）

- ・1日目にアイデアを共有した結果、どのように、他の専門家と協働して次のステップに進めることができる可能性があるか、話し合う。この結果考えたアイデアについて、次回会合である12月までに、どのように活動に移せるかを考える。

（下線の講演者等は、主催若手アカデミー委員）

## 5. シンポジウム等（第24期開催）

※第24期に会員・連携会員であると考えられる者が複数名、挨拶・講演することが要件。  
(また、第24期冒頭にて主催分科会等を早急に設置すること。)

提案17

公開シンポジウム「歴史総合」をめぐって(2)  
—中学校と高校の歴史教育を考える—の開催について

1. 主催 日本学術会議史学委員会高校歴史教育に関する分科会、日本歴史学協会
2. 日時 平成29年10月28日(土) 13:30~17:30
3. 場所 駒澤大学駒沢キャンパス 1-204 教場
4. 分科会等の開催 なし

### 5. 開催趣旨

高等学校の次期学習指導要領では、必修科目「歴史総合」と選択科目「日本史探究」・「世界史探究」が新設されることになっている。高等学校の歴史教育が大きな転換点に直面している。この問題に、歴史学界からはこれまでも多方面から意見が寄せられてきたが、今回のシンポジウムでも、中学校と高校の歴史教育の望ましいあり方について、歴史教育の実践を踏まえて、積極的に提案し、議論していく。

### 6. 次第

13:30~13:40

開会挨拶：若尾政希（日本学術会議連携会員、一橋大学大学院社会学研究科教授）

13:40~14:00

趣旨説明：君島和彦（日本学術会議連携会員、東京学芸大学名誉教授）

司 会：中野聡（日本学術会議連携会員、一橋大学大学院社会学研究科教授）

14:00~17:20

報告

日高智彦（東京学芸大学常勤講師）

「世界史論・世界史教育論の成果と課題から高校歴史新科目を考える」

富田 武 成蹊大学名誉教授）

「ロシア革命：『歴史総合』ではどう教えるか」

倉持重男（東洋大学非常勤講師）

「新学習指導要領によって中学校歴史の授業はどうなるか？—学校現場から考える」

17：20～17：30

閉会挨拶 木村茂光（日本学術会議連携会員、東京学芸大学名誉教授、・日本歴史学協会委員長）

7. 関係部の承認の有無 第一部承認

（下線の報告者等は主催分科会委員）

※ 申請理由：来期の会員・連携会員の2名以上が参加する体制の確保を見込んでいます（高校歴史教育に関する分科会の構成員から23—24期連携会員の若尾政希委員、木村茂光委員がシンポジウム参加予定）。

公開シンポジウム「国立自然史博物館の設立を目指して  
—ネットワーク型博物館を目指す地域との連携—」開催について

1. 主 催：日本学術会議基礎生物学委員会・統合生物学委員会合同動物科学分科会、基礎生物学委員会・統合生物学委員会・地球惑星科学委員会合同自然史・古生物学分科会
2. 共 催：琉球大学、沖縄科学技術大学院大学、沖縄美ら島財団、沖縄生物学会、沖縄県国頭村、沖縄県大宜味村、沖縄県東村、国立自然史博物館設立準備委員会
3. 後 援：沖縄県
4. 日 時：平成 29 年 11 月 4 日（土）13:00～16:30
5. 場 所：沖縄県国頭村民ふれあいセンター
6. 分科会の開催：なし

7. 開催趣旨：

学術会議は 2016 年 5 月に提言「国立自然史博物館設立の必要性」を発出した。本提言のフォローアップ活動の一環として公開シンポジウムを開催する。自然史博物館は標本を収蔵し、活用するために大型の建物を必要とするが、研究や教育・普及活動を考慮すると、小型の複数施設を保有したり、既存の自然史系博物館と協力・連携したりすることによってネットワーク型の活動形態を考慮する必要もある。本シンポジウムではネットワーク型の自然史博物館の可能性について検討する。

8. 次第：

13:00～13:10

挨拶：西田 睦（日本学術会議連携会員、琉球大学理事・副学長）

13:10～13:40

基調講演：

沖縄まるごと博物館—国立自然史博物館のあり方を考える

土屋 誠（日本学術会議特任連携会員 琉球大学名誉教授）

13:40～15:10

ネットワーク型国立自然史博物館と地域の連携について語り合おう

映像で見るやんばるの森の希少生物とその生息環境

湊 和夫（昆虫写真家）

なぜ、やんばるは残ったのか—自然と人とのつながり

当山昌直（元沖縄県教育庁、沖縄生物学会会長）

やんばるの自然をどう守るのか—エコツーリズムの先進地ガラパゴスに学ぶ

真板昭夫（北海道大学観光学高等研究センター特任教授）

自然史科学をご存じですか？

馬渡駿介（日本学術会議連携会員、北海道大学名誉教授）

15:10～15:20

休 憩

15:20～16:20

パネルディスカッション

司会：西田 睦（日本学術会議連携会員、琉球大学理事・副学長）

パネリスト：土屋 誠（日本学術会議特任連携会員 琉球大学誉教授）

湊 和夫（昆虫写真家）

当山昌直（元沖縄県教育庁、沖縄生物学会会長）

真板昭夫（北海道大学観光学高等研究センター特任教授）

馬渡駿介（日本学術会議連携会員、北海道大学名誉教授）

宮城久和（国頭村長）

伊集盛久（東村長）

宮城功光（大宜味村長）

岸本健雄（日本学術会議連携会員、お茶の水女子大学客員教授、東京工業大学名誉教授）

寺北明久（日本学術会議連携会員、大阪市立大学大学院理学研究科生物地球系専攻教授）

松浦啓一（日本学術会議連携会員、独立行政法人国立科学博物館名誉研究員）

大浜浩志（沖縄県環境部部長）

16:20～16:30

閉会の挨拶：馬渡駿介（日本学術会議連携会員、北海道大学名誉教授）

9. 関係部の承認の有無： 第二部承認

（下線の登壇者は、主催分科会委員）

※申請理由

- ・開催場所の国頭村の会場の都合やシンポジウム演者の日程調整のため、11月以降でなければシンポジウムを開催できないため24期に開催するもの。
- ・なお、来期の会員・連携会員の2名以上が参加する体制の確保を見込んでいる（今期動物科学分科会から23-24期連携会員の岸本健雄委員及び寺北明久委員、自然史・古生物学分科会から23-24期連携会員の西田睦委員及び松浦啓一委員がシンポジウムに参加予定）。